

はつにじ／春に初めて立つ
虹を指す。太陽の光が弱い
ころの虹であり、淡くはかな
い様子を表す。

らしく

自分らしく、
粋なくらし



CLOSE UP

伝統文化を後世に伝える

安佐町鈴張東上花田植保存会

地域に残り古くから伝わる文化を
継承するために使命感を持って取り組む

こま遊び広島こまの会

遊びを通して楽しみながらこまの魅力を伝える

宝町・鶴見町・鶴見町南部まちづくり協議会

地域に伝わる伝統文化を復活させ、
地域交流を促進し絆を深める

連載

▶Hmi助成支援団体のご紹介ほか ▶人材バンク 名人 宝人 達人 ▶ようこそ!公民館へ～安佐北区内公民館～
▶らしくレポート・想いをカタチに! まちづくり学校[水都MAP誕生編] ▶らしくコラム・郷土広島の文化継承
▶情報の森 ▶プラザ通信



地域に残り古くから伝わる文化を 継承するために使命感を持って取り組む

CLOSE
UP

伝統文化を後世に伝える

今回は古くから各地域に伝わる伝統文化を、次世代に継承しようと活動している団体を紹介します。

安佐町^{すず はり ひがし かみ}鈴張東上花田植保存会

復活のきっかけは 小学校の創立 100 周年記念行事

秋の豊作・凶作を支配する田の神を祭り、人や牛馬の安全と五穀豊穡を祈願する田植えの共同作業を表現した「花田植え」。広島県では北広島町の「壬生の花田植」が世界無形文化遺産に登録されて知名度がありますが、広島市でも「花田植え」は戦前から行われており、戦後に一時中断したものの、昭和50年に復活した後、約40年にわたって活動を続けている団体があります。それが安佐北区の「安佐町鈴張東上花田植保存会」です。

「鈴張の花田植えは、古くは江戸時代から行われていたと記された書物も残っていますが、はっきりとした起源は不明です。しかし戦前には行われており、戦後私自身が子どもの頃は参加していました」と現在、事務局長を務めている誰角勝明さんは語ります。

戦後も行われていた鈴張の花田植えは、時代の移り変わりとは

もにいつの間にか途絶えてしまいましたが、昭和50年に鈴張小学校が創立100周年を迎えるにあたって、記念行事の一つとして復活します。

「復活する際、私たちは年配者に田植え歌を習い、太鼓だけを新たに購入し、その他の笛や手打鉦、さんばいさん（音頭取り）



▲（左）副会長の稲田寿雄さん、（右）事務局長の誰角勝明さん

が打ち鳴らすササラ（竹製楽器）、そして衣裳はそれぞれの家に残っていた物を持ち寄りました。歌は、譜面が残っていたわけではなく、年配者が歌う歌を何度も聞いて、繰り返し歌って覚えたものです」と誰角さんは、復活した当時のことを懐かしそうに振り返ってくれました。

一年に一度の花田植えを楽しみに 後継者問題にも取り組む

復活後は、鈴張地区の中に存在した2つの花田植団体が一緒になって、鈴張の3つの地域を一年ごとに回っていましたが、平成元年に、他団体が後継者問題などもあって活動を停止。以来、「安佐町鈴張東上花田植保存会」のみが活動をしています。

現在は、小学生から70歳くらいまでの男女合わせて約30人が参加。その大半が鈴張地区に住む人ですが、以前鈴張地区に住んでいた人も参加し、毎年5月の第4日曜日に花田植えを行っているほか、近隣の町のイベントにも出演されています。

「昔、田植えはその地区の共同作業が普通で、何軒かの農家が集まって一緒に行っていました。しかし今は、田植えも機械化が進み、手植えで行っている農家はほとんどありません。しかしこの花田植えが、今では世代を超えた住民交流の源にもなっています。花田植えは、六調子の歌6種類を歌って、1回あたり約30分程度です。歌の長さは本来その倍近くありますが、観に来られている方に短い時間でも花田植えの魅力が伝わるよう、いろいろと工夫して取り組んでいます」と誰角さんは語ります。

昔を知る地区の年配者にとっては、自分たちが子どもの頃を懐かしむ思い出として一年に一度の花田植えを楽しみに待っている人も多いそうですが、今は後継者問題に悩んでいるのも事実です。

「行事をやめるのは簡単ですが、地区に伝わる文化を守らねば考えると、やめることはできません。参加してくれる人が年々少なくなっていますが、40年続けてきた行事が消滅することを避けるためにも、鈴張地区以外の方々でも、意欲のある方がいらっしゃれば、ぜひ参加して欲しいですね」。

地域に残る伝統文化を守り、継承していく術を探り続け活動する皆さんの姿勢に、強い使命感を感じました。



▲「鈴張東谷大花田植」の様子

自分らしく、
粋なくらし

Vol.44
初虹号
2016.3

contents

- 01 特集
伝統文化を後世に伝える
▶ 安佐町鈴張東上花田植保存会
▶ こま遊び広島こまの会
▶ 宝町・鶴見町・鶴見町南部まちづくり協議会
- 05 Hm 第13回 助成事業成果発表会
第14回 助成事業公開審査会の案内
- 06 Hm助成支援団体のご紹介
▶ ロングトレイル研究会
▶ 集いの縁側プロジェクト実行委員会
- 07 人材バンク 名人 宝人 達人
▶ しおん中国舞踊広島
▶ NPO法人上中調子神楽団 あおぞら子供神楽団
- 09 ようこそ！公民館へ・安佐北区内公民館
- 10 らしっくレポート
▶ 想いをカタチに！まちづくり学校【水都MAP誕生編】
らしっくコラム
▶ 郷土広島の文化継承
比治山学園
赤木 昌彦 理事
- 11 情報の森
- 15 プラザ通信



【表紙写真】「鈴張東谷大花田植」の様子

遊びを通して楽しみながらこまの魅力を伝える

こま遊び広島こまの会

こま遊びを通して、世代を超えた交流 子どもの夢中になる様子や、笑顔が喜び

平成8年、代表を務める中島昭雄^{なかしま しょうお}さんが、自身の子ともこまで遊ぼうと思ったことが活動のきっかけでした。両手に持ったひもの上でこまを自在に転がしながら空中で回す技“ちょんがけ”を見て感動。自分でもその技に挑戦したくなり、夢中になるうちに、こま遊びを通じて知り合った仲間とともに作ったのが「こま遊び広島こまの会」です。

「こま遊びといえば、こまとこまをぶつけ合う“ケンカごま”が一般的には知られていますが、熊本がルーツとされる“ちょんがけ”も、凄い技ですよ。目の前で回るこまを眺めていると、いつの間にかその様子に引き込まれています。出前講座を開き、子どもたちの前でこまを回したら、歓声を上げて食い入るように見つめるんです」と中島さんは語ります。現在は、幼稚園や児童館、大学で年間約30回近くの出前講座を続け、子どもたちの夢中になった笑顔に喜びを感じるという中島さん。特に大学での出前講座では、幼稚園教諭や保育士を目指す学生が、教育実習で出かけた先の子どもたちにも、こま遊びの楽しさを教えられるようになることを大切にしているといいます。学生たちからこま遊びのエピソードを聞く度に、こま遊びという子どもの文化が着実に継承され、世代を超えた交流が図られていることを実感するそうです。



▲ 出前講座の様子

伝統芸の素晴らしさが大人を童心に帰す

また中島さんは、こま遊びだけでなく、数多くのこまのコレクションをしています。「自分がこま遊びを始めた頃、デパートの催事会場で江戸独楽^{ごま}を作る職人^{ひろい まさあき}広井政昭さんの作品に触れ、何ともいえない粋で洒落っ気のある独楽の面白さに引かれました。通常こまは回して遊ぶものですが、約300年の歴史を持つ江戸独楽は、こまの回転力を使ってさまざまな動きを作り出し表情が豊かなのが特徴で、“からくりごま”とも呼ばれています。職人が作る独創性あふれる面白いこまの作り、芸の細かさ、細工の細かさには驚かされます」。

中島さんの自宅には、ペーゴマ、江戸独楽、手作りごまなど、所狭しとこまが置かれており、自身もどれだけの数を所有しているか分からないそうです。

今では中島さん自ら轆轤^{ろくろ}でこま作りにもチャレンジ。色とりどり、形も異なるさまざまな形のこまを作って、出前講座で木の持つ優しさに触れてもらい、希望者には販売もし、こまの普及にも力を注いでいます。



▲ 代表の中島昭雄さん

「子どもたちにこま遊びを通して、日本の伝統芸の素晴らしさや楽しさを教えることで、私たちも童心に帰って楽しくなるし、新たな発見もあります。それがこま遊びの魅力ですね」と最後に中島さんは語ってくれました。

日本に古くから伝わる遊びを通して、自身も楽しみ、文化の継承を図っているその姿に、大きな夢を持って活動していると感じました。



▲ 中島さんのこまのコレクションの一部

地域に伝わる伝統文化を復活させ、地域交流を促進し絆を深める

宝町・鶴見町・鶴見町南部まちづくり協議会

隣接する町内会の団結が 地域の文化継承の礎を作る

長年廃れていた伝統文化の一つ、いかめしい顔つきの獅子頭が力強く舞い、篠笛の軽やかな音色が響きわたる獅子舞を復活させ、地域全体で盛り上げようと取り組んでいるのが、中区竹屋地区の「宝町・鶴見町・鶴見町南部まちづくり協議会」です。

「私たちが小学生の頃は、地域の秋祭りや亥の子祭り、とんど祭りなどの行事の時には、朝早くから町中に太鼓や篠笛の音色が鳴り響き、上級生が元気に獅子舞を舞っていたものです」と語るのは宝町町内会の会長辻隆幸^{つじ たくみ}さん。平成22年、竹屋地区にある商業施設のリニューアルに合わせて竹屋小学校に隣接する宝町、鶴見町、鶴見町南部の3つの町内会が小学生の通学時の交通安全問題について話し合いを重ねる中で、地域の文化の継承についても一緒に進めていく事を考え、その昔、この地区で行われていた獅子舞を復活させることが決定。その後、復活にかかるさまざまな問題を解決し、平成24年から「宝町・鶴見町・鶴見町南部まちづくり協議会」として獅子舞を舞い始めます。

「獅子舞は、当時の竹屋公民館の館長のつながりで、南区の邇保姫神社の指導を仰ぎました。平成24年の秋に、メンバー15人ほどで邇保姫神社の獅子舞の稽古を見学。祭りばやしの譜面はなく、稽古の様子を録音したものを何度も聞き直し、篠笛や太鼓、鈴を見よう見まねで再現しました。舞に欠かせない篠笛も、メンバーが竹を使って必要な数を手作りしました」と鶴見町町内会の会長合田一基^{ごうだ かずき}さんは語ります。



▲ 竹屋公民館まつりでの様子

地元への強い思いが 大切な文化の継承につながる

かつての町の活気を今の子どもたちにも味わってもらい、将来へ残していきたいというメンバーの思いが一致し、数人の小学生を中心に始めた獅子舞。竹屋小学校の理解や地元企業の支援などもあって、スタートから3年目を迎えた平成27年には、小学校高学年の児童と中学生など25人にまで増えました。普段は公演前の練習を竹屋公民館で行い、地域のお祭りやイベントなどに定期的に出演しています。

「もともと竹屋学区は、地元愛が強い人たちが数多く住んでいる地域でした。それがこの獅子舞を始めてからは、それまで以上に地元愛、地域との結びつきを感じるようになっていきます。しかし、単身者向けのマンションの増加、事業所の撤退など、地域に住む人々が入れ替わっているのも事実です。今後はそういった方たちにも協力を仰ぎ、もっと暮らしやすい、結びつきの強い町になるように、この獅子舞を通して地域交流を進めていきたいですね」と鶴見町南部町内会の会長福地義行^{ふくち よしゆき}さんは語ります。



▲ 篠笛を手作りしている様子

伝統文化を復活させて、その魅力を次の世代へ伝えて地域交流に役立てる。地元への強い思いがあるからこそ、大切な文化を継承していくことができるのだと感じました。



ショッピングモールでのイベントの様子▶▶

